

キリストの光のキリスト

血筋を 気にする

待降節第2主日

12月9日

(マタイ3:1-12)

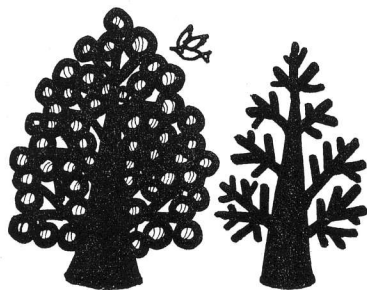
気になることがある。時々、耳にするのだが、「わたしの兄弟には司祭がいます」「親せきにシスターがいます」「わたしは先祖代々の信者です」…。そのようなことを聞くと、それがどうしたの?」と思う。

人は何かにつながっていないければ落ち着かないようだ。そして、つながっている先の人や物の力に頼る。「あの人を知っている」とか「こんな物を持っている」とか…。そのようにつながることで、知らないうちに自分を高めようとしている。「それがどうしたの?」と思う。

身内に司祭やシスターがいることや、先祖代々の信者であることに何の意味があるのだろうか。しかし、人はそのようなことが、何かすごいことだと思ってしまう。

そして、知らないうちに、そうではない人はいたいした者ではないと決めつけてしまう。愚かで恐いことだ。こうして教会の中にも変な差別意識が生まれることになる。

洗礼者ヨハネは言う。「悔い改め



にふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言っておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。血筋がつながっていること

など、神の前では何の意味もなさない。なぜなら、人は皆、血筋をはるかに越えた、というより、それとはまったく別の強いきずで結びあっているのだから。

そのきずなは、悔い改めなければ見えないこと。悔い改めるとは回心すること。回心するとは低いところから見ること。イエスが徹底的に低くなられたように、そのように神の方を、人の方を向くこと。そうすれば、人は皆、血筋ではない強いきずで神に結ばれ、人と人が結ばれていることが見える。うしたの?」ということとはできない。

それに気づいた人、回心した人は「ふさわしい実」を結ぶ。その人は、もはや血筋や身分や学歴や能力や好みなどによってつながらない。人と人のつながりをそのような「部分」に頼らない。「わたし

はぶどうの木、あなたがたはその枝である」と言われたイエスに自分の生き方を委ねる。そして実を結ぶ。

回心にふさわしい実。それは神を天の父と仰ぐわたしたちが互いに愛し合うこと。だれをも差別することなく神の子としてのつながりを大切にすること。

それは教会の中でも具体的なかたちで現れる。単純なこと。ほんとに回心しているのであれば、実りがそこにあるはず。思いやり、やさしさ。互いを尊敬し、大切にすること。悪口は言わない。

天の国はすぐそこに来ている。

今週の福音

10日・月	ルカ	5・17—26
11日・火	マタイ	18・12—14
12日・水	マタイ	11・28—30
13日・木	マタイ	11・11—15
14日・金	マタイ	11・16—19
15日・土	マタイ	17・10—13

（山元眞一福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）